

平成 22年 3月 31日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：平成19年度～平成21年度

課題番号：19720208

研究課題名 (和文) ヒッタイト帝国トウトウハリヤ4世の山の神への傾倒

研究課題名 (英文) Tremendous Commitment to the Mountainous God by Tuthaliya IV of the Hittite Kingdom

研究代表者 平敷イネ (Heshiki Ine)

研究者番号：70446269

研究成果の概要 (和文)：

ヒッタイト帝国トウトウハリヤ王の山の神への傾倒を考古学的及び文献学的に総合的に検証し、歴史的背景から解釈を行った。トウトウハリヤが王名としてではなく、建築儀礼や祭祀文書には「聖なる山」として古ヒッタイト語で記述され、それがヒッタイト帝国の地アナトリアの先住民である、ハッティ系文書に限定している事象を国際的に周知させ、同王がヒッタイト帝国で現時点では、山の神を初めて具像表現として印影に施した事実を指摘した。更に当時は一貫して天候神が主神であり、山の神は低位の神であることを検証しパンテオンに変化はないことを確認した。

王の名が当時強い影響力のあったフルリではなく、ハッティ系である必要性があることに焦点をあてた。トウトウハリヤ4世は、父親の勧めに反し異国の神を自身の守護神とせず、ハッティ系の山を自身の象徴とした。つまり首都において治世を行う王という正当性を周知させる対外的必要性から、先住民ハッティに強く回帰し、山の神を象徴的に用いたという解釈を国際的に発表した意義と重要性が本研究の成果である。

研究成果の概要 (英文)：

This study verified the tremendous commitment to the mountainous god by Tuthaliya IV of Hittite Kingdom in the term of archaeology and philology. The King's name Tuthaliya is described not as a personal name but as a holy mountain in the materials written in old hittite. This remarkable case is recognizable limited to the Hattian documents. This suggestion as well as the factum that Tuthaliya was the first king who has used anthropomorphic figure of mountain god on the seal impression have been noted firstly in the global academic world. During the Hittite Kingdom the weather god reign supreme in the pantheon and the mountainous god was never been at the higher rank, which means that the Hittite pantheon remained consistently.

This study focused also on the necessity that the name of the king should be an Hattian name and not the Hurrian whose impact was enormous at that time. Tuthaliya IV rejected to honor foreign god as his guardian diety and selected an Hattian mountain as his symbol. The significance and impact of this study are the global presentation of the synthetic historical interpretation of this background. The king had to go back to his ancestors in order to demonstrate and propagate externally his validity of reign in the capital by using the mountainous god as a well-known symbol.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|---------|---------|---------|
| 2007年度 | 900,000 | 0 | 900,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |

| | | | |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,900,000 | 300,000 | 2,200,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：西アジア考古学、宗教学、ヒッタイト学、美術史

1. 研究開始当初の背景

ヒッタイト帝国の首都である現在のトルコ中央部に位置するハットゥシヤ（ボアズキョイ）は、1907年以来戦争などによる短期の休止期間をのぞき、今日までほぼ継続的に数世代にわたりドイツ調査隊によって発掘調査が行われてきた。ヒッタイト王国は、紀元前2千年紀（紀元前1680年頃）にアナトリアの小国家群を征服したラバルナ1世により樹立され、400年以上続いたが紀元前1200年頃に滅亡した。紀元前16世紀頃に既に確立された最古とも称される製鉄技術や、ハットゥシヤ北東部のヤズルカヤの岩壁に彫り込まれた神々の行列は考古学及び美術史的研究の見地から、またインド・ヨーロッパ語族アナトリア語派に属するヒッタイト語は、20世紀初頭より言語学的研究の対象としてそれぞれ調査、解説が進められてきた。本研究の対象である山の神への傾倒が顕著な、トゥトゥハリヤ4世の治世（紀元前1250年から1220年頃）に編年される一次資料は豊富であり、ハットゥシヤ出土の粘土板文書やスタンプ印章印影に認められる銘の解説から、ヒッタイト王国のパンテオン（神々の体系）におけるヒエラルキーもポプコヤハースなどのヒッタイト語学者により明らかにされてきている。また、ハットゥシヤ内のニシャンテペから約2000点に及ぶスタンプ印章印影が更に出土しており、研究開始当時はミュンヘン大学のヘルボルトが考古学的見地からこれらを図版化し、ロンドン大学のホーキンスが象形文字銘文の解説を担当した著作の刊行が予定されていた。

また、これまでの研究では、考古学的研究にせよ文献学的研究にせよ主にハットゥシヤ出土の一次資料の調査権を有するドイツの主導によるものであったが、最近では1986年以来中近東文化センターにより発掘調査が行われているハットゥシヤ南方に位置するカマン・カレホックにおいての、ヒッタイト古王国時代の城塞都市遺構の発見や、科学分析により世界最古級の鋼と判明した鉄片の出土などにより、製鉄技術や王国発展のプロセスの解明に新たな視点からのアプローチが可能になるのではないかと注目がされている背景があった。この遺跡におけるスタンプ印章

出土なども期待され、ハットゥシヤ出土の印章印影を補填する形で考慮が可能になれば、新たな視点が視点が開かれてくる可能性もある。

しかしながら、これまでの研究では考古学、文献学の両見地から総合的にトゥトゥハリヤ4世の山の神への傾倒を考察したものはなかった。1930年代にギューターボックが総括して発表したヒッタイト・スタンプ印章印影やネーヴェのハットゥシヤ発掘に関する著作の中では、約700に及ぶトゥトゥハリヤ4世のスタンプ印章印影もカタログ化され、個別に形状やモチーフが叙述されているが遺物事例としての発表にとどまり、事例の圧倒的な数量は認めるがその歴史的・宗教史的背景を追求するものではなかった。スタンプ印章印影に擬人化され表現される山の神は通常、先細のとがった角冠をかぶり、連なる山々を表したスカートをはき、横をむいた状態で描かれている。

本研究代表者は、ドイツ・ハイデルベルク大学において従事した博士論文で、ネオ・ヒッタイトのレリーフ（浮き彫り）を研究対象とし、レリーフ上に表現される個別要素の図像解析を行った。このネオ・ヒッタイトと称される諸侯国は、ヒッタイト王国の滅亡後、紀元前1200年頃から紀元前800年頃にかけて現在のトルコ南部からシリア北部にかけて点在し、ヒッタイトの伝統を継承したといわれている。しかし、この諸侯国においてレリーフ上に山の神の表現は殆ど認められず、多くは天候神であることに気づいた。ヒッタイト帝国時代に数多く事例のあるスタンプ印章印影も、ヒッタイト象形文字が書かれたものが数個出土しているのみであり、神々の図像表現は見当たらない。また逆にヒッタイト帝国時代には天候神の表現は、前述のヤズルカヤの事例など非常に限られたものであることも気づいた。

このヤズルカヤはトゥトゥハリヤ4世の治世に完成したとされ、2つあるうちのA室と称される大きな部屋の壁には神々の行列が岩壁に浮き彫りにされており、向かって左側と右側に男神と女神にわかれて神々が奥の部屋に向かって行進していく配置となっている。奥の部屋の壁には、主群像が浮き彫りにされ

ており、正面部分で丁度行列の先頭にたつ神が向かい合うように描かれている。文献学の見地からこのA室の浮き彫りは、ヒッタイトのパンテオンを表すといわれ、先頭に他の像よりも大きく表現されているのは、主神の天候神である。この天候神は、頭部を垂れて、小さく表現された2柱の低位の神の頭の上に足をかけてまたがる形で表現されているが、その2柱の低位の神は、連なる山々を象徴したスカートを着けていることから山の神と解釈できる。しかし、なぜトゥトゥハリヤ4世が低位とされる山の神に傾倒したのかという矛盾点や、自身の象徴として山の神を選んだ理由にはこれまで全く言及されていなかったため、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究では、まずトゥトゥハリヤ4世がヒッタイト帝国時代のパンテオンにおいて低位とされる山の神に傾倒したという矛盾点を明らかにする。山の神への傾倒がトゥトゥハリヤ4世の個人的嗜好の問題であるか、またはパンテオン内での神々の力関係が外部からの影響などにより変化をきたした可能性も否定できないため、ヒッタイト帝国時代のパンテオンにおけるヒエラルキーを文献資料をもとに先行研究の学説をふまえながら再度検討し、天候神を主神とし山の神を低位とする概念が一環して継続しているものであるかを検証していく。更に、パンテオン内ヒエラルキーに変化が認められない場合には、トゥトゥハリヤ4世の事例を特殊例と捉える。王の子アルヌワンダ3世の治世になると山の神の具像表現は数点にとどまり殆ど認められなくなるため、トゥトゥハリヤ4世に特化して王の信仰傾倒に関する分析を行い、また王が自身の象徴として山の神を選んだ理由を究明することを本研究の目的とした。

さらに本研究は、従来の研究が考古学または文献学のどちらかに偏りがちであった点を改め、考古学及び文献学の両見地から相互に組み合わせ総合的にアプローチすることにより、有機的な意味をもたせ歴史的背景を解明していく研究を可能としていくものである。また、これら目的に向けて研究を遂行することにより、これまで事例報告や図録化に偏向しがちであったヒッタイト帝国時代のスタンプ印章印影の背景にある、歴史的・宗教的意味を究明していくことにより、これまでヒッタイト帝国時代から一貫して継続していると考えられているヒッタイトのパンテオン内のヒエラルキーに変動があったことが確認できればこれまでの定説に新たな見解を提示でき、低位の神を自身の象徴としたヒッタイトの王（人間）の神に対する信仰姿勢などにも新たな視点を供給することができようとする研究意義があった。

3. 研究の方法

本研究には3年間を計画し、資料収集、考察、途中経過報告、総括、国内外における発表と段階的に研究を遂行した。

まず研究1年度目には、日本国内および海外において文献学・宗教史を中心としたヒッタイト関連文献の収集を行った。トゥトゥハリヤ王の治世時代やトゥトゥハリヤ王に特化した資料に限定せず、歴史的な変遷を追従するためにヒッタイト古王国成立以前の様相を述べる文献も広範にわたり検索し、資料とした。

海外における文献収集は、ハットゥシャの発掘を主導した国として一次資料発表権利を有し、豊富な文献数を誇るドイツを中心に行った。ドイツ国内ではテュービンゲン大学、ミュンヘン大学、ハイデルベルク大学図書館を訪問し、日本国内では入手不可能または入手困難である文献の補填を行い、並行して文献及び図像をデータベースへ取り込んだ。先行研究においては文献学からのアプローチが多いが、学説の検証を兼ねて本研究代表者自身もヒッタイト語講座を受講し、言語を基礎から確認しながらヒッタイト楔形文字で記されたヒッタイト語文献一次資料を読み解いた。

また、ヒッタイト帝国時代のパンテオン構成を明らかにするための一環として、文献学の見地から吉田大輔研究員（中近東文化センター）、ガブリエラ・フランツ・サボー博士（ミュンヘン大学）、ヨースト・ハーゼンボス教授（ミュンヘン大学）各氏との意見交換を行うことで文献学、言語学、ヒッタイト学的見地からの学説と考古学的見地による解釈との相違を明らかにした。

さらにトルコ・アンカラ在のアナトリア文化博物館所蔵のスタンプ印章印影閲覧、撮影及び文献資料利用の許可申請を行い、一次資料と現地における遺構や遺物の出土状況を分析した。

研究2年度目には、トルコを訪問しハットゥシャおよび新たにヒッタイト帝国時代に年代付けられる印章を多数出土しているオルタキョイを見学し、発掘責任者であるアイギュル・スエル教授による説明を受けながら実地における状況を検証した。さらにヤズルカヤにおいても山の神が描かれている岩壁の立地条件を確認し、これら主要となる遺跡のトルコ国内における地理的位置を把握することにより、相互的関連性を検討していく上での資料とした。

また研究途中報告として、これまでに得た資料や見解をまとめ日本オリエント学会及びトルコにて開催された国際ヒッタイト学会において学会発表を行い、国際的なヒッタイト学者や考古学者との専門的なディスカッション

を通し、特にヒッタイトの宗教観念に対して理解を深めた。特にマンフレッド・フッター教授（ボン大学）による宗教学的な指摘を参照とし、トゥトゥハリヤ4世が父親より推奨された女神イシュタルを守護神とすることを拒否した旨を顕著に記した資料を得て解釈上の重要な観点とした。さらに未発表および入手困難であったトルコ国内刊行文献の補填も可能となった。

研究最終年度には、前年度までに収集した資料及びデータベースをもとに研究総括を行い、トゥトゥハリヤ4世の山の神への傾倒理由を解釈し、国際アッシリア学会において研究成果を発表することにより本研究が国際的に初めて指摘し、有機的な解釈を行った王の山の神への傾倒と象徴がもつ歴史的意義を公表した。

4. 研究成果

ヒッタイト帝国内に複数存在した民族の宗教的背景とアッシリア帝国との利害関係をも最終的には検証していくことにより、本研究の総括を行った。

首都ハットゥシヤにて王座にあるトゥトゥハリヤ王と、タルフンタッシャ市に滞在を余儀なくされていたクルンタ（人名）間で締結された契約から、ヒッタイト帝国内におけるタルフンタッシャ市及びクルンタの存在を解釈上の重要な考慮事項として検証を行い、研究途中結果を論証的に補完し、国際アッシリア学会（パリ）にて研究成果発表を行った。

この研究発表では、まずトゥトゥハリヤが王名としてではなく、建築儀礼や祭祀文書には「聖なる山」として古ヒッタイト語で記述され、それがヒッタイト帝国の地アナトリアの先住民である、ハッティ系文書に限定している事象を国際的に周知させた。本研究代表者はこれまでの研究では知られていなかった、トゥトゥハリヤ4世がヒッタイト帝国では現時点において検証されている中で初めて、山の神を具象表現として印影に施した事実を国際的に指摘した。そして前述の建築儀礼や祭祀文書からヒッタイト帝国時代のパンテオンにおいては、一貫して天候神が主神であり、山の神が天候神にとってかわるほどの上位の神としては述べられていないことを検証し、パンテオン内のヒエラルキーに変化はないことを確認した。しかし、トゥトゥハリヤ4世が山の神に傾倒していた理由はなにか。本研究では総括において、その理由解明に焦点をあてた。トゥトゥハリヤという名が、当時（紀元前1680年頃～紀元前1200年頃）王朝において、強い影響力を奮っていたフルリ民族ではなく、ハッティ系である必要性の背景が、文献資料「ハットゥシリノ弁明」に顕著にみられることを指摘した。そし

てこれまでにとなえられてきた、フルリのヒッタイト帝国内における文化的、言語的な強い影響力から当時の王朝はフルリ人による王朝ではなかったかとする学説に疑問をなげかけた。トゥトゥハリヤ4世の父であるハットゥシリ3世は異国の神を崇め、正統な王位継承権をもつものを排除し王位に就いた。しかしトゥトゥハリヤ4世は、父親の勧めに反し異国の神を自身の守護神とせず、ハッティ系のトゥトゥハリヤ山を聖なる山とし自身の象徴とした。ヒッタイト帝国内では長子相続が通常であったという観点から捉えると、正統な王位継承権を持つクルンタをタルフンタッシャ市に留め、首都を脅かさない契約を締結させたといえる。つまりトゥトゥハリヤが首都において王位にあり治世を行う王だという正当性を周知させる対外的必要性から、アナトリアの先住民ハッティに強く回帰し、山の神を象徴的に用いたという解釈を、国際的に発表した意義と重要性が本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①平敷イネ、ヒッタイト帝国の王と山の神、オリエンテ、査読無、37巻、2008、pp. 13-17

〔学会発表〕（計8件）

①平敷イネ、トゥトゥハリヤIV世と山の神 - ヒッタイトパンテオンにおける特異性、日本オリエント学会第49回大会、2007年9月30日、日本、関西大学

②平敷イネ、ヒッタイト王への脅威、日本オリエント学会第50回大会、2008年11月2日、日本、筑波大学

③平敷イネ、（ポスター発表）3Dモデリング応用一例、日本オリエント学会第50回大会、2008年11月2日、日本、筑波大学

④Inne Heshiki, Ththaliya IV and The Mountain God - an archaeological and philological study, International Congress of Hittitology, 2008年8月26日、トルコ、チョールム

⑤Inne Heshiki, Significance of the Mountain God in the Reign of Tuthaliya IV, 55e Rencontre Assyriologique Internationale, 2009年7月7日、フランス、パリ学術アカデミー

⑥Inne Heshiki,

⑦平敷イネ、（要旨発表）ネオヒッタイトの天候神の靴に関する考察、日本オリエント学会第51回大会、2009年10月11日、日本、同志社大学

⑧Inne Heshiki, Illuyanka - ein Beitrag zur ikonographischen Studie, Anatolische Literaturen "Autoren" -Textstrukturen - "Zubehoer", Internationales Symposium, 2010年2月18日、ドイツ、ボン大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者 ()

研究者番号 :

(2) 研究分担者 ()

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :